

劉白唱和詩復原の問題点

序論

中唐の時代には、詩人の唱和詩を収めた唱和集が多く作られるようになった。劉禹錫と白居易とによる「劉白唱和集」は、その代表的なものの一つである。この「劉白唱和集」は、そのままの形では伝わっておらず、多くの研究者達によって、劉禹錫・白居易それぞれの集の中から詩を組み合わせる作業が行われてきた。その中には、研究者の間で異なった意見のものも含まれている。

本稿では、それらの先人達の業績の中の、くい違った意見のものについて考察することを試みた。これによって、劉禹錫と白居易との唱和文学に対するより正確な理解の一助となることができれば幸いである。

今回使用した参考文献は、以下の通りである。

①花房英樹氏「白氏文集の批判的研究」一九六〇年 彙文

堂書店

橘 英 範

②花房英樹氏「白居易研究」一九七一年 世界思想社
③卞孝萱氏「令狐楚・劉禹錫『彭陽唱和集』復原」(『唐代文史論叢』所収) 一九八六年 山西人民出版社

④朱金城氏「白居易研究」一九八七年 陝西人民出版社
⑤朱金城氏「白居易集箋校」一九八八年 上海古籍出版社
⑥瞿蛻園氏「劉禹錫集箋證」一九八九年 上海古籍出版社
⑦卞孝萱氏「劉禹錫年譜」一九六三年 中華書局
⑧高志忠氏「劉禹錫詩文繫年」一九八八年 廣西人民出版社

本稿では、以上のものを用いて、諸家の説を検討したい。

本論

第一にとりあげるのは、白居易の「令狐相公の劉郎中に

寄せ、兼ねて示さるる長句に和す 和令狐相公寄劉郎中兼見示長句」(二七七〇)という作品である。

日月天衢仰面看 尚淹池鳳滯臺鸞
碧幢千里空移鎮 赤筆三年未轉官
別後縱吟終少興 病來雖飲不多歡
酒軍詩敵如相遇 臨老猶能一據鞍

日月の天衢 面を仰いで看れば

尚ほ池に淹まる鳳 臺に滯まる鸞あり

碧幢 千里 空しく鎮を移し

赤筆 三年 未だ官を轉ぜず

別れて後 縱ひ吟ずるも 終に興少なく

病んで來 飲むと雖も 歡多からず

酒軍 詩敵 如し相ひ遇はば

老いに臨んで猶ほ能く一たび鞍に據らん

この詩は、花房氏・朱金城氏ともに太和五年(八三一)、白居易が河南尹として洛陽にいる時の作品としている。令狐楚は、太和三年(八二九)の冬から天平軍節度使として鄆州にいた。朱金城氏の箋では、「碧幢千里空移鎮」の句について、令狐楚が東都留守から天平軍節度使となったことを指すという。

一方、劉禹錫はこの年太和五年の十月まで礼部郎中として長安にいた。朱金城氏の箋には、「赤筆三年未轉官」の句は、劉禹錫が久しく郎官であったことを指すという。劉禹錫は太和三年からこの五年十月までの三年の間、礼部郎中であり、赤筆三年はこのことを指すと思われる。

この白居易の詩に対して、卞孝萱・朱金城・瞿蛻園の三氏は、令狐楚の「禮部劉郎中に寄す 寄禮部劉郎中」と劉禹錫の「令狐相公の寄せらるるに酬ゆ 酬令狐相公見寄」(七三五)とを組み合わせている。令狐楚の作品は次の通りである。

一別三年在上海 仙垣終日選羣英

除書每下皆先看 唯有劉郎無姓名

一たび別れて三年 上京に在っては

仙垣 終日 羣英を選ぶ

除書 下さるる毎に皆な先づ看るに

唯だ劉郎の姓名無きこと有るのみ

この詩は、詩題に礼部劉郎中といっていることから、太和三、五年の作と思われる。この間、令狐楚は天平軍節度使として鄆州にいた。

劉禹錫の作品は、次のようなものである。

羣玉山頭住四年 每聞笙鶴看諸仙
何時得把浮丘袂 白日將昇第九天

羣玉山頭 住むこと四年

毎に笙鶴を開き諸仙を見る

何れの時か 浮丘の袂を把り得て

白日 將に第九天に昇らんとする

瞿蛻園氏の箋證にいう通り、これは、仙人のことにかりて官位のことと喩えたものであろう。劉禹錫は太和二、五年の足かけ四年の間、集賢殿學士を兼ねていたので、第一句に「羣玉山頭住四年」と表現したのであろう。

卞孝萱氏は、白居易の詩は、この二首と関連して作られたものであるとする。その論拠は、昇進を得ない劉禹錫に対する思いという点で、令狐楚の詩に歌われている心情と、白居易の詩の首聯・頸聯の情がつながっており、劉禹錫の詩と符合しているということであろうか。

たしかに、令狐楚の作品と劉禹錫の作品とは、劉禹錫の官位昇進についての両者の思いが述べられているという点で、唱和詩とするのにふさわしいものであろう。しかし、この二首と白居易の詩とを組み合わせることに問題はないだろうか。

それに対して、花房英樹氏は、白居易の詩と「鄆州の令狐相公の官舎に懷ひを言ひて寄せらるるに酬い、兼ねて樂天に呈す 酬鄆州令狐相公官舎言懷見寄兼呈樂天」(六六九)の詩を組み合わせる。

詞人各在一涯居 聲味雖同跡自疏
佳句傳因多好事 尺牘稀爲不便書
已通戎路逢黃石 仍占文星耀碧虛
聞說朝天在來歲 霸陵春色待來車

詞人各々一涯に在つて居り

聲味 同じと雖も跡自ら疏なり

佳句 傳はるは好事多きに因り

尺牘 稀なるは書に便ならざるが爲なり

已に戎路に通じて黃石に逢ひ

仍ほ文星を占めて碧虛に耀く

聞くならく 天に朝するは來歲に在りと

霸陵の春色 來車を待つ

この詩について、卞孝萱氏の「彭陽唱和集」の復原では、太和三年(八二九)の作とし、令狐楚の「官舎言懷」の詩があつたが佚したものとする。高志忠氏は太和五年の作とし、瞿蛻園氏は太和四年の作とする。

花房氏の復原は、結果だけを記しているため、どういった点を根拠に組み合わせたのかは不明である。

この詩については、令狐楚の原唱が残っていないため、はつきりとは言えないが、白居易の作品と比較すると、劉禹錫のこの詩の首聯で、三人が離ればなれになったことをいつているのは、白居易の詩の頸聯で、会えぬ悲しみを述べているのと共通している。また、劉禹錫の詩の尾聯で会える喜びを述べているのは、白居易の詩の尾聯で会いたい思いを表現しているとの関係がありそうである。

以上に述べたように、意見は分かれており、内容からみると、どちらにもきめがたく思われる。

しかし、私は花房氏の復原に賛成したい。

その理由の第一は、花房氏の組み合わせたものの方が、七言八句という詩型の点で共通しているということである。もちろん、唱和詩の中には原唱と違う詩型の和篇を作ることとはそう珍しいことではないが、同じ詩型で作ることが多いのはたしかである。

理由の第二は、白居易の詩題中に「長句」という表現があるということである。白居易の詩題を見ると、令狐楚の原唱を「長句」と表現しているようである。「長句」という言葉を辞書で調べると、唐代に七言古詩をいうと解説されている。^(三)白居易自身はどのような詩型を「長句」と呼んでいたのだろうか。白居易が自分の詩を、詩題や序の中

で「長句」と呼んでいるのは二十七例あるが、その詩型は、七言古詩が三例、七言律詩が二十四例ある。^(四)

このことから、白居易のいう「長句」は、七言の律詩、古詩を指すものと思われる。そこで、令狐楚の「寄禮部劉郎中」を見ると、一首四句で平仄の整った七言絶句であり、「長句」とは表現しがたいものである。よって、白居易の詩の原唱となった令狐楚の作品は、「寄禮部劉郎中」ではないのではないかと想像される。

さらに、その点から、花房氏が復原した方の劉禹錫の詩を見ると、七言八句のうち、四句目と七句目は、「二四不同、二六対」の規則に合致するもので、近体詩の規則をややはずれたものとなっている。よって、この詩の原唱でもあった令狐楚の詩も、近体詩の規則をややはずれていた可能性もある。

いずれにしろ、令狐楚の原唱は、七言の律詩か古詩であったと考えられるのである。

第三に、「寄禮部劉郎中」と「酬令狐相公見寄」の二首の七言絶句は、まったく劉禹錫と令狐楚の二人が、二人の間のこのみ述べあっている作品であり、そこには白居易との関係がうかがえない。白居易の詩題には、「兼ねて示さる」といつているから、白居易が和した令狐楚の原唱は、白居易にも見せられたものである。その中には白居易のことも述べてあったかもしれない。

白居易がそれに和した詩には、劉禹錫と令狐楚のことがそれぞれ述べられている。であるから、劉禹錫の和詩も、題に「兼ねて樂天に呈す」といい、白居易の存在を意識している、花房氏の組み合わせた作品の方がふさわしいものなのではあるまいか。

以上の三つの点から、私は花房氏の復原に賛成したい。

第二にとりあげるのは、劉禹錫の「樂天の早寒に和す和樂天早寒」(六二六)である。

雨引苔侵壁 風驅葉擁階
久留閑客話 宿請老僧齋
酒甕新陳接 書籤次第排
愴然自有處 搖落不傷懷

雨引きて苔は壁を侵し
風驅つて葉は階を擁す
久しく閑客を留めて話し
宿しく老僧に請うて齋す
酒甕 新陳接し
書籤 次第に排す
愴然として自ら處有れば
搖落も傷懷せず

この詩は、『白氏文集の批判的研究』においては、白居易の「早寒」(二六二二)の和篇とされている。

黃葉聚牆角 青苔圍柱根
被經霜後薄 鏡遇雨來昏
半卷寒簾幕 斜開煖閣門
迎冬兼送老 只仰酒盈樽

黃葉 牆角に聚まり
青苔 柱根を圍む
被は霜を経て後 薄く
鏡は雨に遇ひて來 昏し
半ば寒簾の幕を卷き
斜に煖閣の門を開く
冬を迎ふると老いを送ると
只だ酒の樽に盈つるを仰ぐ

この詩は、花房氏・朱氏ともに太和二年(八二八)長安での作とする。当時、白居易は刑部侍郎であった。朱金城・高志忠・瞿蛻園の三氏も、この詩を劉禹錫の詩の原唱とする。

ところが、花房氏の『白居易研究』では、この二首の詩

の組を唱和詩として収めながらも、『白居易研究』において追加された唱和詩の組の中に、別の詩と組み合わせさせて収めている。つまり、『白居易研究』の中では、この「和樂天早寒」は、異なる二首の詩の和篇として、重複して収められているのである。

『白居易研究』において新たに組み合わされた唱和詩で、原唱とされているのは、白居易の「初冬即事、夢得に呈す初冬即事呈夢得」（三三九三）という作品である。

青氈帳煖喜微雪 紅地爐深宜早寒
走筆小詩能和否 潑醅新酒試嘗看
僧來乞食因留宿 客到開樽便共歡
臨老交親零落盡 希君恕我取人寬

青氈 帳煖かにして微雪を喜び
紅地 爐深くして早寒に宜し
筆を走らせる小詩 能く和するや否や
醅を潑する新酒 試みに嘗めて看る
僧來つて食を乞へば因つて留め宿らしめ
客到つて樽を開けば便ち共に歡す
老いに臨んで交親 零落し盡く
希はくば君 我の人を取ること寛なるを恕せよ

この詩は、花房氏・朱氏ともに開成三年（八三八）の作とする。当時、白居易は太子少傅分司、劉禹錫は太子賓客分司として、ともに洛陽にいた。この作品を劉禹錫の「和樂天早寒」の原唱とするのは、花房氏の『白居易研究』だけではなく、下孝萱氏の『劉禹錫年譜』も同意見である。そして下氏は、劉禹錫の詩の制作年代を開成三年と推定している。その根拠となっているのは、二句目に「早寒」の語が使われていることであろう。

高志忠氏は、下孝萱氏の意見を引用した上で、それを誤りであるとするが、その根拠は明記していない。おそらく、白居易の詩題が直ちに「早寒」である方を組み合わせるべきだということであろう。

さて、ここで三首の詩を比較すると、それぞれに表現の共通点を見出しうる。白居易の「早寒」と劉禹錫のものでは、首聯で「苔」と「葉」とを対句にしている。一方、白居易の「初冬即事呈夢得」の頸聯と、劉禹錫の詩の頷聯では、「僧」と「客」が対になり、また尾聯の「零落」と「搖落」も似かよった語を使用している。

しかし、「苔」と「葉」の対句は、例えば梁の丘遲の「贈何郎詩」に、

檐際落黃葉 堦前網綠苔

檐際 黄葉を落とし
堦前 緑苔を綱す

といった対句があり、また、李白の「長相思」には、

相思黄葉落 白露點青苔

相ひ思へば黄葉落ち

白露 青苔に點ず

という句があるなど、決して目新しいものではない。

また、「僧」と「客」についても、杜甫の「酬高使君相贈」に、

古寺僧牢落 空房客寓居

古寺 僧牢落たり

空房 客寓居す

という句が見え、また、張籍の「寄友人」に、

送客沙頭宿 招僧竹裏棋

客を送る沙頭の宿
僧を招く竹裏の棋

という対句があるなど、これも一般的な表現であるといえそうである。だから、これらの表現の類似から直ちに唱和詩と断定はしがたい。

また、「零落」「搖落」も決して特殊な語ではない。それに、白居易の「零落」は、友人の死の意味で使用されているのに対し、劉禹錫の「搖落」の語には、「楚辭」の「九辯」に、

悲哉、秋之爲氣也、蕭瑟兮草木搖落而變衰

悲しいかな、秋の氣爲るや、蕭瑟として草木搖落し變はり衰ふ。

という用例がある。その王逸注に、

形體易色、枝葉枯槁也。自傷不遇、將與草木俱衰老也。

形體色を易へ、枝葉枯槁するなり。自ら不遇を傷み、將に草木と俱に衰老せんとするなり。

といっており、季節の推移で草木が枯れることと人の体が衰えることをかけた意味で使われている。そうすると、かつて白居易の「早寒」の「迎冬兼送老」の句に正に対応するともいえる。

それでは、どちらが劉禹錫の詩の原唱であるのか。私は、原唱は「早寒」であるという意見に賛成したい。その理由として、私は以下の四つが考えうると思う。

第一に、「和樂天早寒」は、劉禹錫の集では、外集卷一に收められており、その前後は、「早寒」の作られた太和二年（八二八）の作と推定される詩で占められているということである。劉禹錫の集は、編年に構成されているわけではないが、前後に太和二年の作が集中していることは、理由の一つになりえよう。

第二に、詩型が、ともに五言律詩であるということである。先にも述べたように、同じ詩型で唱和するとは限らないが、同じ詩型で唱和することが多いのは事実である。

第三に、劉禹錫の詩題の中で、原唱を「早寒」と表現していることである。白居易の「早寒」は、正に「早寒」と題しているというばかりでなく、内容が、初冬の寒さに関することで一貫している。それに対して、「初冬即事呈夢得」のほうは、自分の近況を報告するような内容で、「早寒」の一語で包括しきれないものである。

第四に、「初冬即事呈夢得」に表れた白居易の心情は、

閑適の情の裏に、非常に深刻な孤独が隠されているが、劉禹錫の「和樂天早寒」は、その答詩としては、あまりに軽くあつさりした内容であるということである。作詩と飲酒、そして僧侶や友人との交際という閑適の日々の中にも影を落とす老人の孤独感が表現された白居易の詩に対し、劉禹錫の詩は、物事に囚われぬ閑適の生活に楽しみを求めるものにすぎない。閑適の生活に忍び寄る孤独に苦しみを覚える白居易に、同じ閑適の生活に楽しみを求める劉禹錫の詩は、あまり意味のないものなのではあるまいか。

むしろ、初冬の寒さと老いの日々を酒で紛らすしかないと述べる「早寒」の白居易に対して、物事に囚われぬ生活の中には楽しみがあるのだと答えたのが、劉禹錫の作品なのではないだろうか。

白居易の「初冬即事呈夢得」の詩は、劉禹錫の「和樂天早寒」を受けとってからさらに十年たった開成三年に、もはやその閑適の生活の中にも暗い影がさすことがあると述べたものなのではないかと私は思う。

以上の四つの理由から、私は、劉禹錫の「和樂天早寒」の原唱は、白居易の「早寒」であるとする意見に従いたい。

第三に、花房氏の「白居易研究」における復原での唱和詩の排列上の問題点をとりあげたい。花房氏の「白居易研究」では、「白氏文集の批判的研究」における復原を増補

し、さらに、『白氏文集の批判的研究』では詩題だけであつたものに詩の本文をも収録している。そして、両書とも、原唱と和篇についての明確な記述はない。

ただ、白居易のものが前にあるのが大部分で、時に劉禹錫のものが前に置かれていることがある。後者は、劉禹錫のものを原唱であると判断されたものであろう。

そうすると、原則としては、白居易のものを先に置き、劉禹錫のものを後に置く、ただし、劉禹錫のものが原唱と明らかにわかる場合は、劉禹錫のものを先に置く、ということになる。だから、白居易のものが先にある場合は、明らかに白居易が原唱と判断されるものと、どちらが原唱か不明のものとの二つのケースが含まれていると推定される。

前川幸雄氏は、『劉白唱和詩の脚韻の研究』で、『白居易研究』に基づいて、和韻の区別をさせているが、排列もそのまま用いており先にある方を原唱、後にある方を和篇として機械的に処理している。ところが、その中には問題とすべきものがあると思う。

白居易に、「劉郎中の鄂姫を傷むに和す 和劉郎中傷鄂姫」(二五五二)という詩がある。

不獨君嗟我亦嗟 西風北雪殺南花
不知月夜魂歸處 鸚鵡洲頭第幾家

獨り君が嗟くのみならず我も亦た嗟く
西風 北雪 南花を殺らすを
知らず 月夜 魂歸る處
鸚鵡洲頭 第幾家ぞ

これと組になるのが、劉禹錫の「嗟く所有り 有所嗟」
(六一五・六一六)二首である。

庾令樓中初見時 武昌春柳闌腰肢
相逢相笑盡如夢 爲雨爲雲今不知

庾令樓中 初め見し時

武昌の春柳 腰肢を闌はす

相ひ逢うて相ひ笑ふは盡く夢の如し
雨と爲り雲と爲って今知らず

鄂渚濛濛煙雨微 女郎魂逐暮雲歸
只應長在漢陽渡 化作鴛鴦一隻飛

鄂渚濛濛として煙雨微かなり
女郎の魂 暮雲を逐って歸る
只だ應に長く漢陽の渡に在って

化して鴛鴦と作って一隻飛ぶべし

白居易の詩は、この劉禹錫の詩に和したものと思われるが、花房氏の『白居易研究』では、白居易のものを先に、劉禹錫の二首を後に置く。前川氏はそれに従い、白居易を原唱、劉禹錫を和篇とする。これに対し、下孝萱・朱金城・高志忠・瞿蛻園の四氏は、劉禹錫のものを原唱とし、私も同じ考えである。以上のことから、花房氏の『白居易研究』の体例からいって、これは劉禹錫の二首を先に置くべきであると思う。

また、花房氏の『白居易研究』の復原の中には、必ずしも劉禹錫のものが原唱であると断言できないと思われるが、劉禹錫を先に、白居易を後に置くものがある。

その一つは、劉禹錫の、『汴州令狐相公鎮に到って改月、偶々懷ふ所を書するに和す二十二韻』和汴州令狐相公到鎮改月偶書所懷二十二韻（六〇三）である。

受賑新梁苑 和羹舊傳巖
援毫動星宿 垂釣取韜鈴
赫奕三川至 歡呼百姓瞻
綠油貔虎擁 青紙鳳凰銜
外壘曾無警 中廚亦罷監

推誠人自服 去殺令逾嚴
起趙容皆飾 幡幡口盡鉗
爲兄憐庾翼 選堵得蕭咸
鬱屈咽喉地 駢闐水陸兼
渡橋鳴紺轡 入肆颺雲帆
端月當中氣 東風應遠占
管絃喧夜景 燈燭掩寒蟾
酒每傾三雅 書能發百函
詞人羞布鼓 遠客獻貂襜
歌樹白團扇 舞筵金縷衫
旌旗遙一簇 鳬履近相攬
花樹當朱閣 晴河逼翠簾
夜風飄鬢鬢 燭淚滴巉巖
玉斝虛頻易 金爐暖重添
映銀窺豔豔 隔袖見纖纖
謝傳何由接 桓尹定不凡
應憐郡齋老 旦夕鑷霜髯

賑を受く 新梁苑
羹を和す 舊傳巖
毫を援つて星宿を動かし
釣を垂れて韜鈴を取る
赫奕として三川より至れば

歡呼として百姓瞻ぐ
 綠油 貔虎擁し
 青紙 鳳凰銜む
 外壘 曾て警する無く
 中廚 亦た監するを罷む
 誠を推して 人自づから服し
 殺を去つて 令逾々嚴し
 赳赳として 容皆な飾り
 幡幡として 口盡く鉗づ
 兄爲りて 庾翼を憐み
 壻を選んで 蕭咸を得たり
 鬱屈たり 咽喉の地
 駢闐たり 水陸の兼
 橋を渡つて 紺幟を鳴らし
 肆に入つて 雲帆を颺ぐ
 端月 中氣に當たり
 東風 遠占に應ず
 管絃 夜景に喧しく
 燈燭 寒蟾を掩ふ
 酒は毎に三雅を傾け
 書は能く百函を發す
 詞人 布鼓を羞ぢ
 遠客 貂襜褕を獻ず

歌榭 白團扇
 舞筵 金縷衫
 旌旗 遙かに一たび簇まり
 鳥履 近く相ひ攙す
 花樹 朱閣に當たり
 晴河 翠簾に逼る
 夜風 飄つて鼓瑟
 燭淚 滴つて曉巖
 玉壘 虚しくして頻りに易へ
 金爐 暖かにして重ねて添ふ
 銀に映じて豔豔を窺ひ
 袖を隔てて織織を見る
 謝傳 何に由つてか接す
 桓尹 定めて凡ならざらん
 應に憐れむべし 郡齋の老
 旦夕 霜髯を鑷くを

この詩と組になるのが、白居易の「汴州の令狐相公に和し奉る二十二韻 奉和汴州令狐相公二十二韻」(二四一二)である。

客有東征者 夷門一落帆
 二年方得到 五日未爲淹

在浚旌重葺 遊梁館更添
 心因好善樂 貌爲禮賢謙
 俗阜知敦勸 民安見察廉
 仁風扇道路 陰雨膏閭閻
 文律操將柄 兵機釣得鈴
 碧幢油葉葉 紅旆火檐檐
 景象春加麗 威容曉助嚴
 槍森赤豹尾 纛吒黑龍髯
 門靜塵初斂 城昏日半銜
 選幽開後院 占勝坐前簷
 平展絲頭毯 高褰錦頭簾
 雷槌柘枝鼓 雪擺胡騰衫
 髮滑歌釵墜 粧光舞汗霑
 迴燈花簇簇 過酒玉纖纖
 饌盛盤心殢 醅濃盞底粘
 陸珍熊掌爛 海味蟹螯鹹
 福履千夫祝 形儀四座瞻
 羊公長在峴 傳說莫歸巖
 眷愛人人遍 風情事事兼
 猶嫌客不醉 同賦夜厭厭

客に東に征く者有り
 夷門 一たび帆を落とす

二年にして方に到るを得
 五日にして未だ淹しと爲さず
 浚に在って 旌重ねて葺し
 梁に遊んで 館更に添ふ
 心は善を好むに因って樂しみ
 貌は賢を禮するが爲に謙なり
 俗阜にして敦く勸むるを知り
 民安くして察かに廉なるを見る
 仁風 道路に扇し
 陰雨 閭閻を膏す
 文律 柄を操り將ち
 兵機 鈴を釣り得たり
 碧幢 油葉葉たり
 紅旆 火檐檐たり
 景象 春麗を加へ
 威容 曉嚴を助く
 槍は赤豹の尾を森て
 纛は黒龍の髯を吒らす
 門靜かにして塵初め斂まり
 城昏くして日半ば銜む
 幽を選んで後院を開き
 勝を占めて前簷に坐す
 平に展ぶ 絲頭の毯

高く褰ぐ 錦額の簾
 雷のごとく槌つ 柘枝の鼓
 雪のごとく擺す 胡騰の衫
 髪滑かにして歌釵墜ち
 粧光つて舞汗霑ふ
 燈を迴らして花簇簇
 酒を過ごして玉纖纖
 饌盛にして盤心殫れ
 醅濃くして蓋底粘す
 陸珍 熊掌爛たり
 海味 蟹螯鹹なり
 福履 千夫祝し
 形儀 四座瞻ぐ
 羊公 長く峴に在り
 傳説 巖に歸る莫かれ
 眷愛 人人に遍く
 風情 事事兼ね
 猶ほ嫌ふ 客の酔はざるを
 同に賦す 夜厭厭たりと

二首の詩は依韻の作品であり、類似した表現も多いが、どちらが原唱かを決定する材料には欠けると思う。花房氏の『白居易研究』は、劉禹錫の作品を先に置くが、その根

拠は不明で、白居易のものを先にする方が、体例に合致するのではあるまいか。

同様に、劉禹錫に、「致仕せる滕庶子先輩に贈る 贈致仕滕庶子先輩」（一五九）という作品がある。

朝服歸來畫錦榮 登科記上更無兄
 壽觴每使曾孫獻 勝境長攜衆妓行
 瞿鏐據鞍時騁健 殷勤把酒尚多情
 凌寒卻向山陰去 衣繡郎君雪裏迎

朝服歸り來る 畫錦の榮

登科記上 更に兄無し

壽觴 毎に曾孫をして獻ぜしめ

勝境 長に衆妓を攜へて行く

瞿鏐として鞍に據り時に健を騁せ

殷勤として酒を把り尚ほ情多し

寒さを凌いで卻って山陰に向って去り

繡を衣る郎君 雪裏に迎ふ

この詩と組になるのが、白居易の「滕庶子の致仕して婺州に歸るを送る 送滕庶子致仕歸婺州」（二七五二）である。

春風秋月攜歌酒 八十年來玩物華
已見曾孫騎竹馬 猶聽侍女唱梅花
入鄉不杖歸時健 出郭乘輶到處誇
兒著繡衣身衣錦 東陽門戶勝滕家

春風 秋月 歌酒を攜へ

八十年來 物華を玩ぶ

已に見る 曾孫の竹馬に騎るを

猶ほ聴く 侍女の梅花を唱ふを

郷に入りて杖つかず 歸る時健なり

郭を出でて輶に乗り 到る處に誇る

兒は繡衣を著て身は錦を衣る

東陽の門戸 滕家を勝れりとす

この二首も、表現に類似したところが多いが、どちらが原唱でどちらが和篇かは分明ではない。しかし、花房氏の『白居易研究』では劉禹錫の詩を先に置いている。

以上、第三として、花房氏の『白居易研究』における復原の中で、排列に問題があると思われる三組の唱和詩について述べた。これらはみな、『白氏文集の批判的研究』ではなく、『白居易研究』に到る間に追加されたものであり、そのために体例の統一を欠いたものかもしれない。

結 び

以上、本稿では、『劉白唱和集』の復原に関するこれまでの研究を検討することを試みた。意見のくい違ったものを、自分なりに比較し判断したつもりだが、まだ多くの誤りがあることと思う。御教示・御批正を乞いたい。

劉白唱和詩は、中唐の唱和文学を研究する上で、重要なものである。しかし、劉白唱和詩については、時代による唱和のしかたの変化や、他の詩人の作品との関連、他の詩人の唱和詩との相違等、まだ研究すべき課題は多いと思われる。本稿はまだまだ出発点の階段に過ぎぬものであるが、今後も劉白唱和詩についての研究を進めたいと思う。

注

- (一) 白居易の詩の作品番号は、花房英樹氏の『白氏文集の批判的研究』による。また、劉禹錫の詩の作品番号は、花房英樹氏『劉禹錫作品資料表』(一九五八年 京都府立大学中国文学研究室)による。なお、テキストは、朱金城氏『白居易集箋校』・瞿蜕園氏『劉禹錫集箋證』をそれぞれ用いた。

- (二) 『全唐詩』卷三三四

- (三) 諸橋轍次氏『大漢和辭典』(初版一九六〇年 大修

館書店)等。

(四) 白居易が自分の作品を、詩題や序の中で「長句」とよんでいる例を以下に並べ、その詩型を記す。詩型の分類は、花房氏の「白氏文集の批判的研究」による。

○重過秘書舊房因題長句(七律)

○微之到通州日授館未安見塵壁間有數行詩讀之即僕舊詩其落句云淥水紅蓮一朵開千花百草無顏色然不知題者何人也微之吟歎不足因綴一章兼錄僕詩本同寄其詩乃是十五年前初及第時贈長安妓人阿軟絕句緬思往事杳若夢中懷舊感今因酬長句(七律)

○聞李尚書拜相因以長句寄賀微之(七律)

○京使迴累得南省諸公書因以長句詩寄謝蕭五劉二元八吳十一韋大陸郎中崔二十二牛二李七庾三十三李六李十楊三樊大楊十二員外(七律)

○暮枉衢州張使君書并詩因以長句報之(七律)

○舒員外遊香山寺數日不歸兼辱尺書大誇勝事時正值坐衛慮囚之際走筆題長句以贈之(七古)

○元微之除浙東觀察使喜得杭越鄰州先贈長句(七律)

○得湖州崔十八使君書喜與杭越鄰郡因成長句代賀兼寄微之(七律)

○聞行簡恩賜章服喜成長句寄之(七律)

○將發洛中枉令狐相公手札兼辱二篇寵行以長句答之

(七律)

○令狐尚書許過弊居先贈長句(七律)

○偶以拙詩數首寄呈裴少尹侍郎蒙以盛製四篇一時酬和重投長句美而謝之(七古)

○家釀新熟每當輒醉妻姪等勸令小飲因成長句以諭之(七律)

○晚春閑居楊工部寄詩楊常州寄茶同到因以長句答之(七律)

○侍中晉公欲到東洛先蒙書問期宿龍門思往感今輒獻長句(七律)

○五月齋戒罷宴微樂聞韋賓客皇甫郎中飲會亦稀又知欲攜酒饌出齋先以長句呈謝(七律)

○劉蘇州寄釀酒糯米李浙東寄楊柳枝舞衫偶因當酒試衫輒成長句寄謝之(七律)

○韋七自太子賓客再除祕書監以長句賀而餞之(七律)

○春來頻與李二賓客郭外同遊因贈長句(七律)

○初冬月夜得皇甫澤州手札并詩數篇因遣報書偶題長句(七律)

○早春憶遊思黯南莊因寄長句(七律)

○近見慕巢尚書詩中屢有歎老思退之意又於洛下新置郊居然寵寄方深歸心太速因以長句戲而諭之(七律)

○夢得前所酬篇有鍊盡美少年之句因思往事兼詠今懷重以長句答之(七律)

○宣州崔大夫閣老忽以近詩數十首見示吟諷之下竊有所喜因成長句寄題郡齋（七律）

○每見呂南一郎中新文輒竊有所歎惜因成長句以詠所懷（七律）

○予與山南王僕射淮南李僕射事歷五朝踰三紀海內年輩今唯三人榮路雖殊交情不替輒題長句寄舉之公垂二相公（七律）

○琵琶引序「……因爲長句歌以贈之……」（七古）

（五）邊欽立氏輯「先秦漢魏晉南北朝詩」（一九八三年中華書局）梁詩卷五

（六）『全唐詩』卷一六五

（七）『全唐詩』卷二二六

（八）『全唐詩』卷三八四

（九）『福井工業高專研究紀要』人文社会科学十六 一九八二年

（十）テキストは「兄」の字を「名」に作る。瞿銳園氏の校語に従い、改めた。